辻元清美の永田町航海記 100

イラストレーション／石坂啓

「カタルシス解消型政治」はNO 混迷の責任認める「勇気」を持とう

早朝街頭演説は冷える。朝七時から九〇分、マイクで訴えながら国政報告を配る。初当選から一六年、雪でも雨でもできる限り続けている。

スーパーの前で演説していたとき。「子ども手当、高校無償化はやめないで」と女性が駆け寄る。シングルマザーで生活保護受給中という。直後に年配女性が「戦争中、ろくに食べず子どもを育てた。子ども手当は贅沢」。雑貨屋店主が「消費税を上げたら店は潰れる」。買物客は「生活保護の人の方がいい生活、ズルイ」。パチンコ屋から出てきたおじいさんは「子や孫にツケを残すわけにはいかんが消費税の前に議員を減らせ」。わずか三〇分の出来事だ。

みんな、大変は一緒。しかし、今まで以上に人の立場に思いを巡らせる余裕がないように感じるのだ。

こんな声に応える政治とは？「自分よりいい目をみているヤツは許せない」という剥き出しのホンネを煽って悪者を作る。それを叩く強いリーダーに喝采を送ってスッキリする「カタルシス解消・トップダウン型政治」が一つ。一方、一人親支援や高齢者・障がい者のケア、反貧困運動など、地域での問題解決をめざすNPOなどと連携する「市民参加・ボトムアップ型政治」がある。

大阪では「カタルシス解消型」の波が高い。どの会合でも「維新、維新」。でも私は今年も新しい公共や社会的包摂政策を充実させて「市民参加型」をシブトク追究していく。

二四日から通常国会が始まる。今年は試練の年、すべての国会議員の肩に「混迷の政治を希望の政治に変えられるか」という課題がズシリ。そのためには「政権取り合戦の政治」からの脱却を。ほとんどの政党が与党も野党も経験し「ねじれ」を味わった。だからこそ合意形成の新たなプロセスを生み出さなければ、また何も決められない国会になる。

「予算関連法案を通したければ、子ども手当を修正しろ」と要求し、減額したら「マニフェスト違反だ」と追及する自民党。「原発も財政赤字も誰がここまで悪くした」と言いたいことは多々あるが、この次元の言い合いから生まれるのは国民の閉塞感だけ。それが「カタルシス解消型政治」へと向かう。今国会では与野党が入れ替わったけれど、政治を混迷させた責任は同等と認める「勇気」を持とう、と呼びかけたい。

思えば五五年体制下、演じる役割は固定化されていた。「悪者」与党の自民党と「正義の味方」野党。今の政治は自分だけが「いい子」でいられる状況じゃない。「民主党政権はあかん」と言うは簡単、「では、自民党政権に戻した方がましなの？」と跳ね返ってくる。

二つの大政党が似てきてしまう構造的な問題は小選挙区制度だ。小さな選挙区の半分以上の人に名前を書いてもらわなければ当選しない選挙制度を変えない限り、「政権交代→ねじれ→政治不信」の負のスパイラルは解消されない。

新年、自民党の加藤紘一さんから電話。「今の政治を憂える議員のつながりができつつある。テーマは小選挙区廃止。渡部恒三さんにも声をかけた」。超党派で若手を集めてほしい、とのこと。「政界再編」の声もあるが？　（つじもと　きよみ・衆議院議員）

1月17日17時現在。最新情報は ››››››››››››› つじともWEB http://www.kiyomi.gr.jp/　ツイッター @tsujimotokiyomi